
僕と彼女と彼女の大切な場所

剣先

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女と彼女の大切な場所

【Nコード】

N7659X

【作者名】

剣先

【あらすじ】

幼い頃に両親をなくした神本悠斗は、普段から人間関係を築くことに何処か積極的になれないでいた。そんな悠斗は、入学した正林学園高校で学園理事長の娘である山女薫に出会う。初めて会った瞬間から金持ちの娘らしく不遜な態度をとる彼女は悠斗を半ば無理やり、天神荘という、自らが運営する共同の生活施設のような場所に連れて行く。そこで悠斗を待ち受けていたのは、管理人としての生活と、強烈な仲間たちだった。クラスメイトの内気少女の森内さん、その兄で風俗店経営者の猛さん、チャラ男兼ハツカーのマコさん。

そんな人達との生活が普通であるわけがない。

序章 僕と彼女の大切な場所

『吹き溜まり』

雪や落ち葉が風で吹き寄せられて、または海や湖沼で水の流れによつて落ち葉等が運ばれて、体積している場所。インターネットで調べたらそう出てきた。

「この場所は吹き溜まりに例えるのが一番相応しいと思うんだ。決してゴミ箱やゴミ捨て場ではなくてね。ここに溜まっている奴等にとつてココは本来居るべき場所じゃないんだ。本当にゴミ捨て場だった方が幾分も救いがある。ただ一時的に、そしてどうしようもなく、ここに来てしまった奴らばかりなんだ。」

彼女が、前に呟いていた言葉だ。

「なんでゴミ箱の方が救いがあるの？だつてゴミだろ？」
あまりにも無知で無作法な僕は、ついそう訪ねてしまった。それを聞いた彼女は少し悲しそうな顔をして笑い、そしてそれからその表情を無理して塗りつぶそうとしているかのように、変に真面目な顔になって優しく囁いた。

「それは自分の正しい居場所がわかつているからさ。ゴミはゴミ箱に。君だつてそれくらい小さい頃に習っただろ。しかし吹き溜まりにいる奴らにはそれがわからないのさ。自分がどこに行くべきなのかわからない。だから・・・だから吹かれて溜まる。それがどんなに悲しいことか君にわかるかい？」

いつもは口汚い彼女の柔らかな口調に僕は思わずドキリとする。それなのにこんなに寂しい気持ちになるのはなんでなのだろう？

「でも、ゴミ箱に間違えて大切なものを捨ててしまうことだってあるよね？」

僕は彼女の説明を聞いても正直あまりわからなくて、頓珍漢な質問をしてしまう。

それを聞いた彼女は、驚いたように目を丸くした。キラキラと光る

彼女の瞳は、まるで月の輝きをビー玉サイズに押し込めたかのような不思議な色を放っていた。

「君は本当に面白い人だね。けれども確かに君の言うとおりかもしれない。でもだからこそ、こんな場所が存在しているのかもしれないね。一時の。そして仮の居場所だったとしてもココは彼らに居場所を与えてくれる。もしかしたら学校に似ているのかもかもしれない。

3年なり4年なり決まった期間だけの居場所かもしれないけど、その場所はまさしくそこに通う人の居場所になることができる可能性を秘めているんだ。一番の違いはその終がいつ来るのか私たちにはわからないという点に尽きるだろう。」

そしてまた彼女はこうも言った。

「吹き溜まることで周りの流れを滞らせてしまっているのは、まぎれもない事実かもしれない。ただ君には周りの流れに乗って生きることが正しいだなんて思っただけで欲しくない。だってそうだろう？自分が望んでもいないような流れに乗るくらいなら、ここに溜まっている馬鹿共のように、その流れに必死に逆らっている方が生き物らしいというものだ。まあ人間らしいのかどうかは私にはわからないけどね。」

「人間らしい方が重要なんじゃないかな？僕達は人間なんだから。」
彼女は僕のそんな言葉を聞いて、今度は声を上げて笑った。

「本当に君は強い人間だ。相手にどんなにうまい言葉を並べられようと物事の本質をつかむ力を持っている。だからこそ君は僕たちの中で特別な存在なんだと思う。しかし私達は人間である前に生き物で有りたいたいと願っているんだよ。ここはそのへんの認識の違いなんだろうね。」

僕のことを強い存在という彼女の意見に、僕はわからないどころか、皮肉を言われているような気がして少しだけムツとした。だって僕はここに流れ着くどころか、彼女に手を引いてもらわなかったらそんな仮の居場所さえ見つけることさえできなかつた間抜けな人間だ

からだ。そんな僕が強いわけないだろ？

しかしそれ以上に重要な事柄に僕は意識を支配されていた。僕の耳は確かに聞いた。確かに彼女が言った「私達」という言葉を。やはり彼女はどうしようもないほどに、彼等の一員なんだろう。特別言葉に出して言うことはないが、そのことは彼女自身が一番わかっているはずだ。自覚があるはずなのだ。だからこそ、この場所は彼女にとって大切な場所で、そして彼等にとっても掛け替えのない場所なのだと思う。

しかしそれは、余りにも寂しすぎるんじゃないだろうか。いつ訪れるかもわからない終を自覚しなければならいなんて。仮の居場所である必要がどこにある？ここが本当の居場所じゃ駄目なのかい？

「違うんだよ。違うんだよ。悠斗。」

僕の名前を呼ぶ彼女の声は、静かなのに泣き叫んでいるような気がして、僕はハツとして彼女の顔をのぞき込む。

「だからこそ、この場所を私は必死になって守ろうとしているんだよ。勿論いつかは私の力が及ばずこの場所を出ていかなければならないかもしれないし、もしかしたらこの場所自体なくなってしまうかもしれない。けれども。だからこそ僕達はこの場所を守ろうとしているんだ。無くなる可能性のないものを大切に思えるほど人間は謙虚にはできていないんだよ。永遠の居場所を見つけられる人なんてこの世にどれだけいるのかな？私にはわからないよ。」

その言葉で、初めて僕は彼女の言っていることが、なんとなくわかった気がした。けどなんでなんだよ？君がこんなに悲しそうな顔をしているのは。

「別に何でもないさ。悲しい顔をせずにこんな話をしろという方が無理な話ってだけ。それとも君は、こんなに悲しい話をしているのに私に笑顔を強要するのかい？」

言っていることとは裏腹に彼女は既にいたずらっぽい笑顔を浮かべていた。

やめてくれよ。君は何時だってそうだ。悲しい話をしているって自

分で言うなら、無理に笑顔なんて作らないでくれ。なんで君はつかり我慢するんだ？ 悲しいときは悲しい顔をして、泣きたい時は泣けばいいだろ。これは君が僕に言ってくれた言葉だ。それに結局逃げているだけじゃないか。今いる場所を失ったときに傷つくことから、しかし僕の中で生まれた不条理な気持ち、言葉になることなく、きつく握りしめられた拳の中に虚しく消えていく。やはり僕は弱い。あの時の僕は、わかっていなかったんだ。その彼女の悲しげな顔や、寂しげな作り笑いの本当の意味を。文字道理なにもかも全てわかってなかったんだ。これから、彼女に起こる事件も、僕達が立ち向かうことになるであろう事柄もひっくるめて。

しかしその話をするのは、またの機会にしよう。まずは僕と彼女、そして彼等との出会いから話さなければいけない。僕がどうしようもなくこの場所に居場所を見つけるまでのその話を。

1章 桜色の出会い

それは僕が青林学院高校に入学して一ヶ月ぐらい経った時のことだった。その年の桜は異常気象の為か5月上旬だというのに、今だ、色鮮やかにもえていた。そんな季節外れな薄紅色と、雲ひとつない空が描く深海のような青で彩どられた部室棟の屋上で、僕達は出会った。

「君は何をやっているんだい？」

その音は、大地より湧き出たばかりの湧き水のように冷ややかに澄み、低くもなく高くもないその色は、聴くもの心を穏やかにさせる不思議な音階を奏でていた。

まるで子守唄のようだ。

その声を聞いた僕は返事をすることも忘れて、それどころか振り返ることさえせずそんなことを考えた。

「私は、授業をサボってこんなところで何をしているのかと聞いているんだけど。」

その声色を全く崩さずに、もう一度彼女はそう言った。ハツとした僕は急いで体を起こして振り返る。

僕の視界に飛び込んできたのは、その落ち着いた声とは酷く不釣合な、幼げな容姿をした小柄な女の子だった。涼し気な切れ長な目に、すっとした鼻立ちからは凜とした強さが感じられる。

鮮やかな桜色によく映える真っ黒なその髪はショートウルフでも言うのかわからないが、今風な感じで短めに切りそろえられ、中性的な魅力を放っていた。

一陣の風が吹き抜けて、彼女の髪と少しだけ短めなスカートがふわりと風に舞う。

「それとも私に見えている君の耳はハリボテなのかい？」

僕は、作り物のような少女の造形に思わず見とれていた。

「あつ。えーと……。何をしてるって寝てただけだよ。」

ハツとした僕は、急いで言葉を並べる。

「ぶつ。なんの捻りも無ければ、面白みもない答えだ。君が寝ていることぐらい見ればわかるさ。私は君と会話がしたいと思ったからこの質問をしたわけで、君はその意を汲み取ってもう少し気の利いた答えを返すべきだ。それが空気を読むということだ。」

少女は、さも可笑しそうに吹き出した。

僕はそれを聞いて呆然としてしまう。全く失礼な話だ。何をしているのか聞くから寝ているという返事を返したというのに。

よくよく考えれば、なんで僕はこんな初対面の少女の質問に真面目に答えてしまったのだろう。そう思うとなんだかムカムカしてきし、自分自身が情けなくなる。

「面白みもないって……。君の方こそ授業中にこんなところで何をしてるんだよ。それにココは高等部の部室等だ。君は中等部の生徒だろ？」

僕がそう言うと、少女は見る見るうちに顔を真っ赤に染め上げる。「ちよつ！なんて失礼な奴だ！私は歴とした高校生だよ。君と同じ高校一年生だ。それとも君は女性を子供扱い出来るほど自分を大人だとも思っているのかい？」

先程までの落ち着き払った声が嘘みたいだ。そんな彼女の反応を見てむかついていたことも忘れて思わず噴出してしまう。

「ふふふ。ごめん、ごめん。僕あんまり友達もいないし、君が同学年だなんて知らなかったんだ。ほら・・僕は視力も悪いから、よく見えなくて。君は何組なの？僕の名前は悠斗。一年四組だ。」

因みに視力が悪いというのは嘘である。僕の目は、先程彼女のスカートが舞い上がるのをしっかりと捉えていた。

「ふん。君に友達がいなことぐらい見ればわかる。そんな悲しいこと私にいちいち説明しないでくれたまえ。まあいい……。」「

彼女はまた赤い顔を隠すように、下をむいてボソボソとつぶやく。

酷い。確かに中学生と間違えた僕が悪かったけど、そこまで言わなくてもいいのに。てか、そんなに友達いないように見えるかな？

僕は彼女の言葉を聞いて思わずガツクリ肩を落した。それを見て少女はやり返してやったと言わんばかりにニヤリと悪そうな笑みを浮かべる。

こいつガキだ。

「私の名前は薫。山女薫。薫と呼んでくれて構わない。今君は私に何をしにきたのか聞いたよな？」

なぜか彼女の顔にはより一層いたずらっぽい笑が浮かんでいる。僕はその顔を見て思わずドキリとしてしまう。正直可愛いと思ってしまった自分が悔しい。

僕は怖々とウンと頷く。それを見た彼女はニツコリと満足そうな表情になる。

「私は君に会いに来たんだよ。ここにすれば君に会えると聞いてね。神本悠斗君。」

*

これが彼女との出会いだった。これから僕の高校生活を。いや、高校生活どころか僕の日常を大きく掻き回すことになる山女薫との

「なんで僕の苗字を知ってるんだよ。さつき名乗ったっけ？」

「名乗っていないよ。君はそんなことも覚えていられないほど記憶力が低いのかい？そもそも会いに来たんだから、元々知っていたと考えるのが妥当だと思っただけだ。」

「じゃあなんで僕のことを・・・？」

「なんでって君が有名人だからに決まっているじゃないか。高等部から入ってきた変わり者が授業にも出ずに部室棟の屋上で昼寝してるってね。」

僕が通う青林学院は、内部生と言われる中学時代からこの学校に通う生徒達が所属する1〜3組みと、外部生と言われる高校から入ってきた生徒が所属する4組からなる基本中高一貫の私立高校だ。

1〜3組は金持ちの良いとこの御子息・御息女ばかりで、反対に4

組は大概一般の世帯よりも貧しい家庭の子供たちが集まっている。それはこの学校が、高校からの入学者に特別安い学費と寮、それに独自の奨学金制度を導入しているためだ。僕も学費の都合でこの高校への入学を決めた。

「えっ。本当に？目立ちたくないって思ってたここにコソコソ居るのに。」

僕は彼女に有名人と言われ正直焦っていた。なるべく人目を避けるためにこの部室棟でのんびりと過ごしていたというのに。

それを聞くと彼女は呆れたように目を見開いてこう言った。

「君は本当にそう思ってたのかい？入学早々授業をサボって悪目立ちしないわけないだろ？この学校ならなおのことだ。皆温室育ちの生ぬるい連中ばかりだから、君のことを不良と呼んで怖がっていたよ。かくいう私もその温室育ちの一員だ。四組の生徒達だって貧しくて勉強がしたいという真面目な連中が多い。」

正直、目からウロコだった。僕が通っていた中学は荒れに荒れていたため、いくら授業をサボろうとも目立つことなど決して無かった。それどころか、たまにはサボらないと変な目で見られてしまうぐらいだ。

てか、この子4組の事を遠慮なく貧しいって言いやがった。

しかしそれで不愉快になるといったことはなく、逆に僕は彼女の遠慮ない物言いに好感を抱いた。僕はそういった家庭の事情というか自分にどうしようもない事で同情されるのが大の苦手なのだ。相手が苦い表情を浮かべるのを見ると本当に申し訳ない気持ちになる。

「でも僕が有名人だったとして何で君は・・・。」

「薫と呼んでくれて構わない。」

わざわざ話を中断してまで名前と呼ばせるなんて。やっぱりコイツどう考えてもガキだな。

「何で薫はわざわざ僕に会いになんてきたの？だってそんな温室育ちの人たちが、不良に見られてる僕に用なんて無いはずだろ？てか、怖がられてたから僕には誰も話しかけてくれなかったのか。てつき

りヒツソリと過ごせているものとばかり……。」

僕はその事実気がつきガツクリと肩を落とした。そんな僕の様子を見て彼女は朗らかに笑う。

「ははは。僕が君に会いに来た理由なんて一つしかないだろ。面白そうだからだよ。それに、やっぱり君は面白い人だった。やはり私の目には狂いはないみたいだね。」

「狂いまくりだよ。だって面白いことなんて一言も言っていないもの。薫が勝手に笑っているだけじゃないか。」

「別に面白い人っていうのはユーモア溢れる人のことだけを指す言葉じゃないよ。君は存在が面白い。あつ、だからと言って別に君に笑いのセンスがないと言っているわけじゃないからガツカリしないでくれたまえ。」

そう言っただけで楽しそうに近づいてきた彼女は、ポンポンと僕の肩を叩いてくる。不意に甘い香りが僕の鼻をくすぐる。

存在が面白いって、可愛い顔して何気にひどいこと言うな。そんな事を考えて頂垂れる僕を嬉しそうに見つめたあと、彼女はこう続ける。

「この学校の生徒にこんなにも興味を持ったのは初めてだよ。うん。私は君が欲しい。」

僕はそれを聞いて、口をあぐりと開け放つことしかできなかった。心底言っていることが理解できなかったからだ。もう少し順序を追って会話をするといいことを覚えたほうがいいと思う。僕が欲しいって、僕自身をどうやってあげればいいと言っただけ？

「君は何時まで口を開けているつもりだい？私は君が……。」

そこまで言うとな彼女の顔が、何故かみるみる朱に染まっていく。「別に欲しいって言うのはそういう意味で言ったわけじゃないからな。この場合の欲しいというのは……。」

全くもって一人で忙しいやつだ。てか、このとんでも少女は何言っただけ？

「そういう意味って？この場合って??？」

僕は何を言っているのかあまりにもわからなかったので素直に聞き返した。

「馬鹿！もういい！！兎に角放課後またここに集合すること。私より遅かったりしたら怒るからね。」

そう言うのと彼女はプリプリとしたまま階段を下り、校舎のある方角に戻っていった。

なんで僕が怒られなくちゃならないんだ。

勝手に来て勝手に怒って帰っていった、台風のような薫を見送りながら、僕はそんなことを考えていた。

それに『怒るからね』って……。まあでも放課後も特にすることなんてないし別に構わないか。

*

五時限目の終了を告げるチャイムを聞き、僕は教室に戻った。

このまま午後の授業は屋上で過ごし、みんなが下校したあとの時間を見計らって、寮に戻るつもりでいたのだが、予定を変更して6時間目の授業に出席することにした。それは別に向学心に煽られての事ではない。

彼女が来たときに既に僕がいたら、元から居たとしても『早く来て張り切って待ってたな。』と思われるだろう。そうなると妙に悔しい。

そう考えると僕はおちおち寝てもいられなかった。

「ねえ、なんの授業？」

僕は隣の席の女の子に声をかける。本を読んでいたその子は急に話しかけられてびくっと肩を震わせると、

「ひゃつ。・・・えつと・・・こ・・・くご・・・です。」

と遠慮がちに目を伏せて、小さな声でつぶやく。

おとなしそうなその少女は、サラッと肩まで伸びる髪とクリクリ

した目が特徴的な小動物のような外見をしている。この子は別に僕のことを特別怖がって、こんなに縮こまっている訳ではない（はずだ。少なくとも僕はそう信じている）。何故ならクラスのみんなに對しても、こんな感じだからだ。きつと物凄く引つ込み思案な子なのだろう。

「そう。ありがとう。えつと……。ごめんなんて名前だっけ？」

「……いえ。……あの……。あつ……。も・森内円です。」

「そっか。なかなか覚えられなくて。でも今覚えたから大丈夫。本を読んでたのにごめんね、森内さん。」

僕が彼女を怖がらせないようになるべく朗らかにそういうと、彼女は一瞬頬をカツと赤く染め、申し訳なさそうに、

「……いえ。」

とだけ呟いて、読んでいた本にまた目を落とした。

国語か。めんどくさい授業のときに戻って来ちゃったな。

僕はハアと深いため息をついた。正直言つて僕は国語の授業が嫌いだ。いや、嫌いというより苦手というべきかもしれない。もっと正確に言うならば、国語という教科が苦手なのではなく、国語の担当教師が苦手なのだと言うべきだろう。

国語の先生は新任の女の先生なのだが、兎に角熱心に授業を行う。とても良い先生で生徒にも好かれているようなのだが、授業中に発言することを強いるこの人は、目立たないことを目下の目標に掲げる僕にとつて天敵のような人なのだ。

「国語の授業、指されると発言しなきゃいけないから苦手なんだよね。」

僕の独り言のような呟きを聞くと森内さんは、本を机にバンと置き、勢い良く身をこっちに乗り出してきた。

「わかります！急に指されて『問1の答えは！？』なんて元氣よく聞かれても困っちゃいます。みんなの前で話そうとするとワーってなっちゃうし……。」

この子近くで見ると、すごく綺麗な顔してるな。

僕は不意なことにビックリしたのと、女の子に急に近づかれたのと
で思わず目をそらしてしまう。

「……ごめんなさい……！」

僕の反応を見て、彼女は冷静さを取り戻したのか顔を真っ赤に初
めてワナワナとしたあと、バツと机に顔を隠すように突っ伏してし
まった。

「全然謝らなくていいから！ねっ!？」

僕が取り繕うようにそう言っても森内さんは恥ずかしそうに目を
伏せて『ごめんなさい。』と村人Aにでもなつたかのように謝り続
けるだけで、それっきり答えてはくれなかった。

運が悪いことに、この授業のうちに3回も指名された森内さんは、
そのたびにバツが悪そうにモジモジと黙り込んだ後、渋々といった
様子で申し訳なさそうに蚊が止まるような小さな声でなんとか答え
ていた。その痛々しい姿はとても健気で、僕の保護欲を強く掻き立
てた。

*

授業と掃除が終わり、僕が部室棟の屋上に戻ると、すでに薫は放
置されたタイヤに腰掛けて不満そうな顔で待っていた。僕は目立ち
たくないのので、一際一生懸命に掃除をこなしてきた。その為HR終
了後すぐという訳にはいかず、少し遅くなってしまった。この部室
棟の屋上には、タイヤから跳び箱まで、不必要になったものの捨て
るには忍びないようなものがゴロゴロ転がっている。

「遅い！私より遅かったら怒ると言ったじゃないか。やっぱり君の
耳はハリボテだったんだね。犬のマイクだって私の言うことをしっ
かり聞くというのに。」

開口一番薫は憎まれ口を叩いた。

「ごめん。でも掃除をしてたら遅くなっちゃって。てか犬と僕を一

緒にしないでよ?」

「確かにそうだね。本当に失礼なことをした。帰ったらマイクに謝らなくちゃ。」

「マイクにかよー!」

僕は思わずつつこんでしまった。

クソ。こういう奴に大きなリアクションを取ったら負けだ。余計に喜ばせてしまう。

僕はそう自分自身に言い聞かせて、冷静を取り繕う。

「で集合したけど何か用なの?」

「用があるから呼んだに決まっているじゃないか。追てきたまえ。」

薫はそう言うと、こちらを振り返りもせずトントンと軽快に階段を下っていった。

そもそもなんでこの子はこんなに偉そうなんだろう?

「おい、早くしな!置いてくよ。」

薫はうまんそうな顔をしてこちらを振り返る。

「ハイハイ。今行きますよ。」

僕はため息をついて階下に向かって言葉を投げた。

「ハイは一回。」

ハアと僕はもう一度ため息をついく。

「ハイハイ。ごめんなさいね。」

上機嫌な様子でびよこびよこ歩く彼女のあとを僕はムツツリと黙り込んで、ついて行った。しかしいつまで経っても目的地的につく様子はない。僕がどこに行くのか訪ねても彼女は不敵に笑うだけだった。この少女の人を食ったような態度は僕のタイミングというかりズムを狂わせる。

「ねえ、どこまで行くの?内部生の君にそんなこと言うのも難なんだけどこれ以上進んだら学校から出ちゃうよ。」

体育館の角を曲がればもう校門しかない。それでも彼女は一向に僕の質問に答える素振りを見せず、いよいよ校門をくぐるというときになってやっと口を開いた。

「誰も校内に目的地があるなんて言っていないと思うのだが？」

「ちよつと待つてよ。僕の寮は校内にあるんだけど……。」

正直に言つて僕は校外に出るのが恐ろしいほどに億劫だった。そんな僕の露骨に気だるそうな態度を見ても彼女は全く気に止める素振りを見せない。

「そんなものは知らないね。たまには君も外出したまえよ。休日も含めてずっと寮の部屋に引きこもっているそうじゃないか。だから入学して一ヶ月も経つというのに友達の一人もできないんだ。」

「なんで薫がそんなこと知ってるん……。てか、余計なお世話だ。」

そう言つてそつぽを向く僕を見て彼女は嬉しそうに微笑んだ。

「いい反応だ。そういう反応をとってもらえると私も嬉しい。」

しまった。またリアクションをとってしまった。

僕はチツと小さく舌打ちする。

そんなふうにくだらないやりとりをしながら歩いているとすぐに目的地に着いた。いや。正確には第一の目的地でも言うべきか。学校最寄の『五日原駅』である。

つて駅？何で駅なの？駅つて事はもしかして電車に乗るの？

「ちよつと待つてよ。僕は絶対嫌だからね。」

先程は態度で示しても伝わらなかつたようなので、今度は言葉に出して『面倒臭い』ということをはっきりと伝える。

「大丈夫。たつたの一駅だ。何を隠そう僕達の目的地は戸宮駅だからね。なんだったら歩いても行ける距離だよ。それに君がこれから毎……。」

「いや、一駅とか関係なく面倒くさいんだけど。ほら、僕宿題しなくちゃいけないし。」

僕は咄嗟に小学生レベルの嘘をついた。

「今日宿題でてないつて4組の人が言つてた。」

彼女はジト目でそう言つと、僕の手を引っ張った。

「ほら、御托はいいから行くよ。」

僕はその手を振り払う事もできず、なすがままに引つ張られていく。

実際に目的の駅は一駅先にあつた。2分程度で到着したので歩いてもいけるといふのは本当の話なのだろう。しかしだからなんだと言つんだ。

「まったくもつ……」

僕はやや諦めも入り、首を左右に振る。

それにしても違う街に来たのも、かれこれ一ヶ月ぶりくらいだなあ。

僕は入学以来、できる限り学校の中で過ごしていた。どうしても、なにか買う必要がある、外に出なくてはならない時でさえ五日原野駅直結のショッピングモールで済ませた。校内に本屋と売店くらいはあるし、インターネットショッピングで事足りたため、実際にわざわざ出向く必要性もなかったのである。

僕はこの街の人間ではない。さらに言えばこの街の人間でもない。小さい頃から孤児院で育つた僕には家というものがいないし、ホームというものがない。勿論今まで面倒を見てくれた美咲園の園長の事は大好きだし、どれだけ感謝しても足りないくらいの恩がある。美咲園がホームなんじゃないかと言われれば、もしかしたらそうなのかもしれない。しかし、だからこそ僕は早く独り立ちしたかった。だからこそ僕は学費の安い青林に進学した。進学するしかなかったのだ。

けれども『しかなかつた』からと言って、この高校に入学したくなかつたというわけでも、この街に来たくなかつたというわけでもない。はつきり言って、どっちでも良かった。早く独り立ちできれば本当にそれでよかつたのだ。

早くバイトも見つけないとなあ。

僕は、戸宮駅から出るとそう考えながら日の傾きかけた空を眺めた。この駅がある商店街の名を告げるアーチと、両脇にズラリと佇む店々で空がとても狭く感じた。行き交う人々は皆生活感が滲み出てい

て、街には観光ズレした雰囲気もない。まるで東京とは思えないような雰囲気だ。

近くにこんな場所があったんだ。

如何にもココは東京ですといった僕らの学校がある場所から、たった一駅電車に乗るだけでこんな所に来れるなんて思ってもみなかったため、実のところ僕の気分はほんの少しだけ高揚していた。

「何をしているんだい？早く着いてきたまえよ。こんなところでボ―っとしていても得られるものなんて何も無いと思うよ。」

「はいはい。どこまでもお供いたしますよ、姫。」

僕は半ば投げやりに答える。

「ちよつ、君。今なんて言った。わつ・・たしが姫だって!？」

「えっ！なんで!？薫はお姫様みたいだと思うし、いいじゃないか。実際にお人形みみたいな容姿をしているんだから。あつ、でも実際は姫が綺麗だとは限らんのか。」

「きつ・・君は自分が何を言っているのかわかっているのかね!？よくもそんな恥ずかしいことを又ケ又ケと。出会った初日からこんなことは言いたくないが、君はそう言う無自覚で馬鹿なところを直すべきだ。」

薫は涙目になって手近に植えてある街路樹から葉っぱを鷲掴みでむしり取ると、それを僕に向かって投げつける。

「わつ、急に何するんだよ。」

「うるさい。『何』と聞きたいのはこっちの方だ。・・もういいつ。早く行くよ。」

そう言つと彼女は早足で歩き始めた。足の回転数はすごく多いのに、あんまりスピードが出ていないのは彼女が小さく、歩幅が短いからであるつ。

黙つて彼女のもとを歩くこと数分、僕達は商店街を右に抜け、左手に現れる公園の手前を曲がった。

急にこんなに静かになるんだ。本当に東京は面白い街だな。

まだ5分と歩いていないのにもう先ほどの商店街の喧騒が嘘のよ

うである。

すると薫が急に打ちっ放しの外壁のコンクリートの建物の前で足を止める。少しだけ寂れた雰囲気をかもし出すその建物は、妙にきれいな長方形をしている。なにかの会社か何かなのであるうか？

「着いたよ。ここが私たちの目的地だ。」

「えーと、ここは何!？」

「天神荘。僕達の城で、これから君の城にもなる場所だ。」

「君達の城?僕の城?なんだよそれ!？」

「まあいい。早く中に入ろう。皆に紹介したい。」

そう発すると薫は扉に手をかけて、

「ただいま。」

といい、押し放した。僕はそんな彼女に慌てて着いていく。

ん?今ただいまって言った?

中はロビーのような空間があり、そこに置かれたソファーにはいかにも優男といった風体の細身の男が浅く腰掛けて本を読んでいた。「あっ、おかえり、薫。って、どうしちゃったの?男の子なんか連れてくるの初めてじゃないか。」

うわっ、きれいな顔。まるで女の子みたい。

「余計なことを言うな、マコ。」

「でも本当のことじゃないか。ついに薫が彼氏を連れてくるなんて兄としてうれしいよ。」

「か・彼氏ではないし、私に兄弟などいない。そもそもこいつとは今日初めて話したばかりだ。」

「うわー。今日話したばかりの子を家に連れ込むなんて薫も大胆だね。」

そういうとマコさんは、にっこりと微笑んだ。しばらくの間真っ赤になってパタパタとする薫と、ニコニコしながら薫をからかうマコさん?を眺める。

打ちっばなしのコンクリートに、シンプルながら存在感のある家具。デザイナーの事務所のようなおしゃれな空間で言い争う女子高

生とチャライ男の様子はものすごくミスマッチであった。

「えー、と・・あの？」

何時まで経つても終わりそうも無いので僕は遠慮がちに話を遮る。
「あっごめんね。僕の名前は間島真琴。みんなは、マコって呼んでくれてるよ。」

振り向いたマコさんがこれでもかというぐらいの爽やかなウインクを放つ。

「何がだ。 。 気をつけたまえ悠斗。 こう見えてもマコは性質の悪いハツカーで、情報屋のような仕事をしている。」

「もう薫、あんまり褒めないですよ。それに君だって性質の悪い守銭奴じゃないか。」

そういうとマコさんはぺろっと舌を出す。 それを見た薫はチツと舌を鳴らしながら憎憎しげに睨みみつける。

「えーと、僕の名前は神本悠斗です。 悠斗でいいです。」

僕も短く自己紹介する。

「マコ。 こいつが話していた面白そうな奴だ。」

薫が手短に僕の情報を付け加える。 ん？昨日??

「ああ、この子が・・・。 しかし次の日には連れてくるなんて薫は本当に待つということができないんだね。 悠斗君もいきなり連れて来られて大変だったでしょ？」

そう言いながらマコさんは品定めするかのよう目細めて僕を見つめてくる。

なんだかこの人に見つめられると落ち着かないな。

「うん、いかにも薫が気に入りそうな子だね。 これからよろしくね、悠斗君。」

一通り僕を眺め回し終えたマコさんはそう言うのと右手を前に出して握手を求めてきた。

「よろしくお願いします。」

僕はそれにおずおずと応じる。 その様子を薫はなぜだか満足そうに眺めている。

「そう言えば薫？悠斗君の部屋はどこにするの？確か303号室が開いてたと思うけど。ただ3階は女の子用だし。」

「心配要らない。悠斗には一回の管理人室を使ってもらおう。」

何をこの人たちは話しているのだろうか？僕は管理人室を？つて、さつき『ただいま』つていつてたし……。

「えっ、てことは悠斗君は管理人として入ってくれんの！？やったー。これで、輪番で掃除とかやらなくて済むね。」

「ああ。その代わりこいつの給料ぐらいは私たちの方で負担することになるよ？」

「俺は全然かまわないよ。」

当の僕をそつちのけで、2人は楽しそうに話している。

って僕をここに済ませる気？それも管理人として……！

薫の思惑にやつと気がついた僕は急いで口をはさむ。

「ちよつと待つてよ。僕はこの前学校の寮に入寮したばかりなんだよ。そもそもそんな話は聞いていないよ……！」

僕の叫び声を聞いて二人はぼかんとした顔でこつちを振り返る。

それから同時にニヤリと不敵な笑顔を浮かべる。いったい何だと言うんだ。

「じゃあ今話そう。君はこれからこの天神荘で管理人として過ごすことになる。心配要らない。もう学校の寮のほうには話をつけておいた。」

僕は薫の傍若無人ぶりに言葉を発することすらできない。

「やっぱり何も話さず急に連れてきたんだ。薫はいつもそうだよね。けど薫はしつこいから諦めた方がいいよ？」

「何を言っているんだい、マコ？急ではないよ。僕は三日前に、部屋棟に這い上がっていく悠斗を見たときから目をつけていたんだ。

全然急ではないよ。それからの三日間は本当に忙しかった。こいつの個人情報調べ上げることか……。」

「ああ。だから急に管理人室の掃除を始めたんだね。それに薫が実家に帰るなんておかしいと思ったよ。けどそれじゃあ悠斗君

には何も言つてなかつたつてことじゃないか。」

マコさんがなんとなくフォローしてくれているのだが感情が入っていないことがよくわかる。本当にこの人たちは何を言ってるんだらうか？

「なんで君が寮に話を通すんだよ。そんなことでき……。」

ふと我に帰つた僕は必死に糸口を見つけて、口を挟む。

「薫の苗字を思い出してみて？」

マコさんがにこやかに僕の言葉をさえぎる。

「えーと、や・・・まめ？山女！つて学長と同じ苗字じゃないか。」

僕は驚きのあまり噛んでしまう。なんて惨めなんだ……。

「ぶ・ぶつ。『ぎゃないか』だつて？聞いたか、マコ??？」

「うん、聞いた聞いた。今完全に噛んだよね。」

二人はさも可笑しいといった様子でクスクス笑っている。

こいつらふざけやがつて……。それに今僕の個人情報とか、

実家に帰つたとか言つてたけど、それつて……。この野郎!!!
「だからなんだつて言うんだ。僕が嫌だつて言つたらそれまでじゃないか。」

僕は思わず叫んだ。とりあえず訳はわからないままなので、気合ぐらいでは負けては駄目だ。

「そうかもしれないね。けどこれでどうだろう。君がこの荘の管理人をやる代わりに、居住費、光熱費、食費は僕達で負担しよう。それにプラスして月々三万円の給料を支払おう。管理人をすればバイトもできないだらうしね。寮費の一万円と寮食費の一万円、つまり合わせて二万円が浮いて給料まで手に入るんだ。お金のない君にとつて悪い話じゃないだらう？」

「……それは……。」

正直美味しい提案だとは思つた。しかし大人しく従うのが癪だったし、なによりも急展開過ぎて頭の回転が追いつかなかつたのだ。

「それとも、もしかして私と暮らすのは嫌かい？」

僕が長い間機能停止して目をパチクリさせていると、薫が急に不

安そうな表情をして僕の顔を覗き込むようにして上目使いで見上げてきた。

うっ、そんな目をされたら・・・。

「えっと、嫌だっけわけじゃないけど・・・。」

僕が思わずそう言っていると薫はパツと顔を輝かせる。

「そうか、そうか。嫌じゃないか。じゃあ決まりだな。」

「悠斗君。薫もこんなに嬉しそうにしているし、君も特に寮にこだわりがあるわけでもないだろ。それに薫が目をつけたってことは、どうせ特に行く当てもない無いんだろうし。この荘には帰る場所も無いような人しか居ないからね。」

この人も綺麗な顔してはつきりと物を言うな。まあ行く当ても無いのは事実なんだけど。てかマコさんは何を言ってるんだ？あなたはどうか知らないけど、薫は学長の娘だろ？無いどころか立派な家があるはずだ。

「そうだ！薫。悠斗君を上に乗れてってあげたら？時間的に調度だと思っただけど。」

そう言っただけマコさんは壁にかけてある時計を指差す。

「うむ、そうだな。もう六時過ぎか。ついてきたまえ、悠斗。」

薫はそう答えると僕の返事を聞くこともなく動き出す。僕はここで逆らっても意味がないので、さっさと階段を登り始める薫に大人しくついてキッチン右にある階段を登っていく。

「あつ、俺仕事するから部屋にこもるね。ご飯になったら呼んで頂戴。」

登り始めた僕達に下からマコさんが大声をだしている。

「この建物はもともとデザイン事務所として使われていたんだ。その会社が倒産して使われなくなったのを買い取って改装した。なかなかいいだろ？」

薫と僕は飾り気の無い灰色の階段をズンズンと登っていく。

「だからロビーなんかもあるんだね。そうでなければ普通あんな広いスペース作らないもんね。」

二階にたどり着くと一旦足を止めた薫がこちらを振り返る。

「そういつた所だ。ここが二階で男子用のフロアだ。今は居ないがマコを含めて三人の住人がいる。」

そう手短に告げると、また階段を登り始める。前を登る彼女の短めのスカートが足を動かすたびにひらりと動く。

「でここが三階で女子用のフロア。私を含めて二人だ。まあおいおいその辺りは案内するとして……」

そう呟いて薫は更に足を進める。すると重厚な鉄の扉が目の前に出現する。その踊り場で彼女はやっと足を止める。スカートから伸びる足の白さが眩しい。

「さあ、ここだ。君の手で開けたまえ。鍵を回してから頼むよ。」
彼女は得意げな顔をしてこちらを見下ろしている。

「ん。」

僕はゆっくりと階段を登りきり、おもむろに鍵を回す。

なんか、案内までされちゃってどうしよう。まだここに住むなんて一言も言っていないのにな。なんだか既成事実を作られて結婚を迫られる男の気持ちがあわかった気がするよ。

ハアと僕はため息をつき、ドアを押し開いた。

「うわあ。」

僕は思わず感嘆の声を上げる。先程までのモヤモヤするような感覚は瞬間に吹っ飛ぶ。

目の前には、遠くになるに連れて段々と背の高くなる建物と、東京とは思えない広い広い空が広がっていた。近所の公園で遊ぶ子供たちの声が聞こえる。

その遠くに見えるビル群には、目で確認することのできるほどのペースでみるみるうちに夕日が沈んでいく。その沈み行く夕日に染め上げられた空の向こうには絵の具をしませたような雲が流れている。

「なかなかのものだろう。少しはここで暮らすのも悪くないって思ってくれたかい？この辺は民家が多いから少し上に登るだけでも一

気に空が広くなるんだ。それなのに向こう側はまるで摩天楼だ。その摩天楼の一角に僕達の学校がある。」

そういつた彼女はどこか自慢気な表情をしている。薫は屋上の淵まで歩いていくと、柵にもたれ掛かりながら嬉しそうに夕日の方角を指差す。僕もその後が続いて歩く。

正直に言ってもう意地を張るのも馬鹿らしくなっていたし、寮でバイトをしながら生活するより、明らかにこちらの方が効率が良い。それにこんな心躍ったのも久しぶりだというのも認めざるを得ない事実である。

「そうだね。毎日こんな夕日が見られるのなら悪くないかもね。さつきは意地になってああ言ったけど、そもそも僕に断る理由なんて無いよ。どこで暮らそうが関係ない。生活スペースとバイトを同時に得られるなら渡りに船さ。むしろ薫達の方こそいいの？僕は心の中ではこんなにも利己的な考え方をしているんだよ？」

僕がそう言うと彼女は寂しそうに笑った。

「始めはそれでも構わないさ。ここはね・・・すごく不安定な場所なんだ。ここに居る奴等は誰もが望んでここにたどり着いた訳じゃない。さつきのマコだってそうだ。皆どうしようもない何かを抱えている。どうしようもない理由に押し流されてここまで来た。この吹き溜まりのような場所で滞っているんだ。」

「それじゃあ、ある意味僕にピッタリかもね・・・。」

それを聞いて彼女はより一層悲しそうな顔をする。

「ピッタリじゃない奴がこの世に居ると思うかい？」

僕はその言葉を聴いて思わずハツとした。つらいのは僕だけじゃない。誰もが誰も大なり小なりのなにかを抱えて生きているんだ。なんだか僕は自分が恥ずかしくなって俯いた。

「なんで僕を誘ってくれたの？」

薫は表情無く、遠くに見える建物を眺めている。

「私が君を気に入ったからじゃ駄目かい？これ以上話したところで何の益も無い話になる。ただ私と君の深部を抉るだけだ。それに君

を気に入っているのは本当だよ。それでも話せと君が言うならば私はあえて話すでしょう。」

この口ぶりからすると、きっと彼女は理由あって僕を誘ってくれたのだろう。しかし彼女が言わないというのなら、それで構わない。彼女は僕のことを『気に入っているのは本当だ』と言ってくれているのである。

「いや。薫がそう言うのなら、それで十分だよ。」

「ありがとう。」

彼女はぼそりと呟くようにそう言った。

それから僕は淡々と自分の話をした。

僕にとって家族が居ないということは当然の事で、人からその話をされてもなんとも思わない。けれども相手が申し訳なさそうな表情をするのが何とも居たたまれず、普段はなるべく自分からは言わないようにしていた。

それなのに何でこんなところで自分の身の上を話したのかわからない。それも今日会ったばかりの少女にだ。今考えればまったくの謎である。

それでもそんな聞いても何の面白みの無い話を、彼女は表情一つ変えずに、黙って聞いてくれた。普通なら顔を曇らせてしまうような話を。

「つまらない話を聞かせちゃってごめんね。暗くなるだけだよね。」

僕がそう言うと、彼女は必死な様子で、

「つまらなくなんかない。つまらなくなんか……。そんなこと言わないでくれ……。」
と反応する。

そういって彼女の声はなんだか今にも泣き出しそうだった。そんな彼女らしからぬ様子に僕は思わず面食らう。

少しの沈黙が時を支配する。

「本当に僕がここに来て良いの？」

それを聞いて彼女はゆっくり、こちらに振り返る。とてもとても穏

やかな顔をしていた。背後では太陽がビルの背後に完全に沈み、その残像と言えらるぼわっと覆うような、暖かい橙色の、漏れ出た光が辺りを包み込んでいた。それはすごくやさしい色をしていて今度は僕が泣き出しそうになる。

再度沈黙が時を支配する。

「あたりまえだ。私が君を誘ったんだ。天神荘にようこそ。管理人さん。」

天神荘と美咲園

日は沈み、辺りはもう暗くなっていた。先程まで聞こえていた子供の声も、いつの間にかしなくなっている。もう家に帰ったのだろう。家に帰って家族とおいしい晩御飯を食べているのだろう。

そう思ったら、キュウーと僕のお腹がなった。同時になんだか胸が締め付けられるような気がした。

「お腹を減らしてお腹をならすなんて、まるで君は子供みたいだな。今晚はせつかく君が我々の仲間に加わったのだから歓迎会をしよう。」

彼女は照れ隠しするようにそう言つと、スタスタと階段を下りていつてしまつ。

僕達がロビーに行くと、見覚えのある一人の少女が座ってテレビを見ていた。その少女はこちらを見て目を丸くする。

「え・・あれ・？神本君？？」

「つて森内さん。こんなところでなにをやつてるの？」

こんな変人の巣窟で、どうしたんだろう？

まだ薫とマコさんにしか会つていないにもかかわらず、僕は心のそこからここは変人の巣窟であると断言できる。

「こんなところとはなんだね、こんなところとは。」

そう言つて薫はジト目で睨んでくるが無視だ。

「え・・・と。神本君こそ、こんなところでどうしたの？」

そう言われて僕は、なんて答えていいものか思索する。しかし僕の考えがまとまるよりも早く薫が口を開いた。

「円までこんなところだなんて・・・。まあいい。そう言えば円と悠斗はクラスメイトだったね。それならば紹介は不要だ。お互いこれから一緒に住むことになるのだから仲良くしたまえ。」

本当に簡潔に今の状況を説明した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

れ。」

「薫は行かないのかよ!？」

思わず僕は突っ込んでしまった。この無口な美少女と二人っきりになるのは僕には少々荷が重い。

「私には色々やる事があってね。円を頼むよ。」

「カオちゃん。近所に買い物に行くぐらいで頼まないでよ・・・。」

よくわからないことで森内さんは赤くなっている。薫は気まずい空気になるということを気にすることも無くさっさと自分の部屋に引っ込んでいつてしまった。

「えーと・・・あの。」

「うわー、この子めっさ固くなってるよ。」

僕は薫がいなくなった瞬間モジモジする森内さんを見て溜息をつくと、様子を探りつつ言葉を投げる。

「えーと、森内さん?それなら行くこうか、買い物。」

「えっ、あつ、ハイ。ふつつかものですがよろしくお願いします。」
そう言うと森内さんは、あせったように頭を深く下げた。この子は本当に何を言っているのだろうか?

僕達が玄関に向かおうとすると、一度奥に引っ込んでいった薫がトテトテかけてきた。

「二人ともコーラとポテトチップスを買うのを忘れずにね。当然コーラは2リットルでポテトチップスはお徳用の大きい奴だ。コンソメパンチで頼むよ。」

僕達を置いていった奴が何を言いに戻ってきたかと思ったらそれか・・・。

「なんで夕飯の買出しに行くのに、おやつを買うんだよ。」

僕が呆れたようにそう言うと、薫は驚いた表情をしてこう返してきた。まるで僕がおかしいことを言っているみたいである。

「歓迎パーティーをするのにコーラとポテトチップ無しでは始まらないではないか。そんなのは唯の夕食としか呼べない。」

僕と森内さんは無言で顔を見合わせる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・行こっか。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・行きましよう。」
二人の声が綺麗に重なる。後ろではピーチクパーチクと薫の音が響き渡っていたが僕等が振り返ることはなかった。

*

「えーと、驚いたよ。森内さんがここに住んでるなんて。」
「・・・・いえ。私の方こそ驚きました。神本君がカオちゃんと言った面白い人だったなんて。」

「さつきから薫の事をカオちゃん、カオちゃん呼んでるけど仲いいの？あいつあんまり友達いなそうだけど。」

「そ、そんなことないですよ！カオちゃんは面倒見が良いから結構皆に頼られてたりするんですよ？」

学校でもそうだったけど、この子スイッチが入ると急にお喋りになるな。薫とは普通に話してたし。

「カオちゃんとは小学生からの付き合いなんです。カオちゃんが私の通ってた小学校に転校してきたときからの。わたし中学校は地元の公立校に通ってたから別だったんですけどね。」

森内さんは自発的に薫との関係を説明する。

「そっか。よくわからんけど薫の事が好きなんだね。」

「あつ、えーと、はい。その・・・・すいません。」

言いたいことを言い終わり、急に我を取り戻したのか、そう言うときまた森内さんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

そうこうしている内に、『OUSAKEI』という目的のスーパーについた。駅から天神荘に行く道のりにやたらと目立つ赤い店があるなど思い記憶していたので、僕は案内されることもなく場所を把握していた。

「今日の晩御飯は何にするの？」

「もう時間も時間ですし、手早く作れるものにしようかと思います。」

なにかリクエストはありますか？」

「うーん。お米って炊いてないよね!？」

「大丈夫です。私のご飯係なんでしつかり炊いてきました。猛が帰ってこないって連絡が入ったので調度4人前用意してあります。」

「じゃあ手巻き寿司なんてどうかな? あっ、でも海鮮なんか買ったら予算オーバーだよな?」

「・・・そんなことありません。大丈夫・・・だと思います。せっかくの歓迎会なんだから。それではお寿司にしましょう。」

そういついながら海鮮コーナーに移動する森内さんはなんだか嬉しそうだ。きつと料理が好きなのだろう。ほら、凄く楽しそうにネタを選んでるじゃないか。

やつぱり、夢中になると素の自分が出せるようになるんだな。

僕はそんな森内さんの様子を見てしみじみそう感じた。

「神本君は何か好きなネタってありますか? あっ、その海老を取ってもらえますか? ボイルしてあるほう。カオちゃんの好物なんです。」

「ほい、海老つと。僕は、サーモンがあれば後は何でも良いかな。」

僕は森内さんに言われた通り、生海老ではなく、茹でられて赤くなつたほうの海老を手にとる。

「サーモンですね。了解です。あっ、海老はその手前のを取ってもらって良いですか? そっちの方が新しいみたいなんです。」

「うーす。」

本当の森内さんはこちらの方なのだろう。

こっちの森内さんのほうが全然魅力的なのに勿体無いな。

「・・・あ・・・の?」

ふと気がつくと森内さんがとても不安そうな顔をしてこちらを覗き込んでいる。

「私なんか、せっかく取っていただいた海老を変えるだなんて生意気でしたね・・・。」

森内さんは、そう独り言のように呟いてシヨンボリとし始める。

なんてアップダウンが激しいんだ。これでは僕の方が疲れちゃう。
「いやいや、そんなこと無いよ。」ごめんねじつと見たりしちゃって
ただこういう風に生き活きしてる森内さんも魅力的だなって思っ
て、
僕が急いで弁解すると森内さんは、先程カゴに入れた海老よりも
真っ赤になつて下を向いてしまった。

なんで寝てるのにこんなに赤くなっちゃったんだろう？

より一層縮こまってしまった森内さんを見て僕は首をひねる。

「あ・・の。えーと。お会計済ませちゃいましょう。」

森内さんが沈黙に耐えかねたのか、申し訳なさそうにおずおずと
口を開く。

「うんそうだね。お腹空いたしね。」

僕達は早々に会計を済まして店を出た。レジには沢山のお客さん
が並んでいたが、店員の処理スピードがすさまじく、大して待つこ
とも無く順番が来た。気まずい空気のとときにこの店員たちのスキル
の高さは本当にありがたかった。

「さあ帰ろうか。」

手にはパンパンに膨らんだ袋が握られている。

「そうですね・・。でもなにか忘れてる気が・・・。」

森内さんもそんな気がするのか、難しそうな顔をして首をかしげ
ている。

「・・・・・。」「
とポテチ！！！！」

結論にたどり着いた僕等は薫に騒がれるのが嫌だったので、心底
面倒だったのだが陳列棚に戻った。

その晩は本当に楽しかった。お寿司は美味しかったし、その後で
皆でやったトランプも大いに盛り上がった。（なぜか僕の歓迎会だ
というのに、僕一人だけが一発芸をやらされたことは釈然としない
が。あと兎に角森内さんが鬼のようにババ抜きが強く、一番で上が
る度に申し訳なさそうにしていた。）

ちなみに一番楽しそうにしていたのは薫である。普段はあんなにクールを装っているのに、なんで一気に子供みたいな顔に戻るの
だろう？まあ相変わらずしゃべり方は尊大だったけど。僕はそんな
ことを考えながら、夕方の屋上でシリアスモードになった薫の表情
を思い出そうとする。(二階にある男子トイレの個室で踏ん張りな
がら。)

まあ今日が楽しかったわけだしなんでもいいか。

僕が用を済ませロビーに下ると薫が偉そうに腕を組んで待ち受け
ていた。

「君の部屋に案内するから着いてきたまえ。」

今日だけで僕は何回こいつの後をついていった事であろうか？

ツカツカと進む薫はキッチン横の階段の下で立ち止まる。

「ここが君の部屋だ。管理人室だから狭いけど我慢してくれ。ちな
みに鍵はこれだ。荷物が入りきらなかったら屋上においてある収納
ボックスを使ってくれ。」

そういつて階段下の扉を開いた。

ちょうど六畳一間といった所で、奥には窓も着いているしコンセ
ントも沢山ある。

「カオちゃん、可愛そうだよ。三階の一部屋空いてるんだから使わ
せてあげなよ。」

いつの間にか森内さんもやってきた。

「む、しかしこいつは男だぞ？」

「大丈夫だよ。神本君なら何かするなんてこと無いと思うし。」

「いや、しかしだな・・・。」

二人でなにやら話しているが僕の耳には届かない。

「良い。むしろ良い。なんだか秘密基地みたいじゃないか。僕ここ
気に入ったよ！」

僕は堪えきれずに思わず興奮した声を上げてしまう。

「・・」

「」

「………ほら・…本人も気に入ってるみたいだし良いんじゃないか？って君はもしかしてこの部屋が気に入ったのかい？」

薫は自分でそういったものの予想外の僕の反応に驚いているみたいである。

「でも……。絶対不便だよ？良いの・…神本君？」

森内さんが心配そうに見上げてくる。

その見上げる表情は可愛いが、この子は何を心配しているのだろうか？むしろこんなわくわくスポットを僕が使っているのかと申し訳なるぐらいだよ。

「勿論だよ。むしろ使わせてほしい！！」

僕は力強く答える。それなのに森内さんはなぜか最後まで「不便があつたら遠慮なく言つてね？」と心配していた。やっぱりこの子は変わっているな。薫も薫で驚いた表情をしながら「君が気に入ってくれたようで嬉しいよ。」と言っていた。

その日は布団もなかったのでソファで寝た。なれない環境で、お泊りしているような高揚感もあり、眠れるか心配だったのだがさすがに一日にいろいろな事を詰め込みすぎて疲れていたみたいでぐっすりだった。

驚いたことに翌日には、寮にある全ての荷物が引越し屋によって天神荘まで届けられた。さすがは金持ちパワー！

*

「なにやってるんだお前！？てか誰だ？？勝手に入っていいと思つてんのか？」

鼻歌交じりに僕がラウンジの掃除をしていると、急に人相の悪い男が玄関を開けて、押し入ってきた。身長はスラリとしたマコさんより、数センチだけ低いといったところだろうか。真っ黒い髪は短く、ウニのようにツンツンとワックスで固められている。耳に光る

ピアスとその眼光がこの人特有のトゲトゲしさを演出している。しかし特筆すべきはその肉体であると言えよう。細身なのに引き締まった体は、僕のような素人から見ても鍛え上げられているのがよくわかる。腕なんて僕と比べたら同じ人間のものとは思えない。

もしかしてこの人が猛さんか？泥棒がこんなに威張って入ってくるとは思えないし。あれ、そう言えば猛さんの他にももう一人居るって薫が言ってたっけ？

「えっと・・・あの・・・もしかして猛さんですか？」

「なんでお前が俺の名前を知ってたんだ。」

向こうは僕を怪しい奴とでも思ったようで、鷲のように鋭い眼光でこちらを睨んでくる。僕はこの人に睨まれて、肺から空気が漏れ出しているかのような気持ちになる。

『なんで名前を知ってるんだっ！』てことはやっぱこの人が猛さんなんだ。とりあえず挨拶だけはしとかなきゃ。

「あの・・・これからここでお世話になることになった神本悠人です。よろしく願います。」

僕がそう言っただけで頭を下げるとほぼ同時に、また玄関の扉が開かれて誰か入ってくる。

「ただいまー。あつ、神本君ただいまです。ってそれに猛も。今週は帰ってこないんじゃないかなかったの？」

買った物帰りの森内さんだ。女の子らしいヒラヒラとしたスカートが眩しい。

「それについて、こんな訳のわからない奴の方に先に挨拶かよ。てかこいつ誰だよ？お前の知り合い？？中まで勝手に入ってきてるぜ？まあいい下がってる。俺が今から・・・。」

猛さんは森内さんと僕を交互に見た後もう一度こちらを見て、憎々し気にそう呟く。それを見た森内さんは買った物袋とカバンを床に置き焦ったように僕達に駆け寄ってくる。

「ちよっと！訳のわからない奴とか言っちゃダメでしょ！それに神本君は階段下に寝泊まりして、管理人までやってってくれる偉い子な

んだよ!？」

そう言いながら森内さんは、猛さんを隅っこに引っ張っていつて僕の説明を始める。てか森内さん強!こんなチンピラみたいな人にそれができて、なんでクラスではあんなに小さくなってるんだ??
向では、

「なんだよ。そういうことなら早く言えよ。ぶちのめすところだつただろ!」

という、猛さんの声が聞こえる。

おいおい、勘弁してくれよな。いや、マジで。

「おう、管理人!悪かったな。てつきり円目当てのカスが押しかけてきたもんとばかり。」

豪快な笑顔で猛さんは戻ってきた。後ろでは森内さんが、『もう、お兄ちゃんつてば調子良いんだから。まずは確り謝らなきゃ。』などと呟いている?

本当だよ、全く……へ?なんて言いました??今お兄ちゃんつて言いました?ははは。また面白いことを言うな。こんな正反対の兄妹あつてたまるものか。森内さんにユーモアのセンスが有つたなんて!

しかし、よく見れば猛さんは、森内さんにどことなく似て可愛らしい顔立ちをしている。

いや、まさかな。ははは。

「あの、もしかして御兄妹すか?」

僕は恐る恐る口に出してみる。

「うん、そうだよ。ごめんね、お兄ちゃんがバカで。」

森内さんが申し訳なさそうに上目使いで見上げてくる。

「馬鹿はお前だぞ、円。そんな事コイツがいちいち、気にしてるわけないだろ!?!なあ管理人!」

そう言つと猛さんはまた大きな口を開けて笑つた。さつきまで、ボコボコにしようとしていた相手を親しげに『こいつ』呼ばわりした拳句、わかつたようなことを言うこの人の神経がわからない。

「あつ、そつだ！こいつの歓迎会をやるう。折角こんなチャンスがあるのに騒がないのは損だぜ！？」

後半本音が見えてますよ？

「もう、お兄ちゃんつてば！歓迎会なら初日にもつやつたよ！あの・本当にお兄ちゃんが失礼でごめんね。」

なんとアップダウンの激しい兄弟なのであるう。

「おい！ずるいぞ、お前たちばかり！！いや、待てよ？もう一度歓迎会をひらけば良いんだ。それだけ歓迎してるってこつた。なっ？管理人！！」

「えつ、ああ、はい。」

僕には頷くことしかできなかった。あと何度も何度も謝る森内さんが不憫でならなかつた。きつと今までもこの兄の尻拭いをさせられてきたのであろう。なんだか、森内さんがこんなにも謝り癖をつけてしまった理由の一つを見たような気がした。

*

僕がこの天神荘で暮らし始めてから早くも二週間の時が経過した。慣れたこともあれば慣れないこともある。

まずは、管理人としての仕事。これに関しては概ね慣れた。小さい頃から美咲園にて当番制で家事をこなしていた僕にとって、特別なことなどなかつたのだ。毎日が当番だと考えれば何の問題もない。また仕事量が特別多いわけでもない。寮の共用スペースの掃除（風呂やラウンジなど）、食料の買出しと料理、洗濯、ゴミ捨て、電球の交換や備品の修理など、大体そんなもんである。それに洗濯は男物だけだし、料理は森内さんが趣味だからと言って手伝ってくれるし。兎に角こんなもので給料までもらつていいものかとこちらが申し訳無くなるぐらいだ。

「君に目を付けた自分の慧眼が恐ろしい。君がこんなにも嬉々として管理人業務をこなすとは思ってもみなかったよ。」

彼女は少々呆れた表情でそう言っていた。やってみると意外に楽しいんだぞ？管理人業務。まあ管理人業務で唯一の難点と言えば、まだ熱気のももる女子風呂を掃除するときや、洗濯物を干すとき（さすがに下着は部屋に干してみたいだが）、二階の廊下を掃除しているときに女子部屋が見えてしまうときがあり、ついつい意識してしまうということぐらいである。嬉しい悲鳴じゃないかという奴もいるかもしれないが、実際にこの立場に立たされると健康な高校生である僕には少々きつい。

通学の際の満員電車。たった一駅ながらこれにはどうにも体が拒否反応を示したので、僕は自転車を購入した。少々痛い出費ではあったが、これからの電車代を考えれば、結果安く収まることである。因みに僕はこの自転車に『ノーチラス号』と名付けた。

「ちよつと、神本君？これから職員室に来てくれる??」

帰りのホームルームが終わり、まさに『帰りに、スーパーに寄って行くか。ノーチラス号があると買物物が楽で良いな』なんて所帯染みた事を考えている時のことだった。一旦教室から出た担任の水本先生が思い出したかのように、廊下から顔だけ教室に突っ込んで、ハキハキと声をかけてくる。

うわ、面倒くさ！それにそんな大声で僕の名前を呼んだりしたら目立つちゃうじゃないか。

「えーと、すみません。今日バイトがあるんです。」

バイトと言えばバイトだし、嘘は言っていない。いや、多分。「いいからとにかく来なさい。そんなに時間は取らせないから。すっぽかすんじゃないわよ。すっぽかしたらアンタのズボン後ろからずり下ろすから。」

一方的にそれだけ言うと、水本先生は家路につく生徒達に『さよなら！』と元気よく挨拶しながらさっそうと職員室に消えていった。

おいおい、教師が生徒のズボンおずり下ろすって、何事だよ。僕は思わず苦笑いする。

「あの……。」
不意に隣で遠慮がちな声がして僕は、横を向く。

「……買物なら私がやっておくんで神本君は職員室に行ってください。」

森内さんだ。

「ありがとう。でも心配いらないよ。どうせズボンを下ろすなんて……。」

僕はそこまで言つて、あの人なら本当にそんなムチャをやりかねないという事実を思い出す。先日クラスのお調子者がその憂き目にあっているのを見た。

「水本先生なら……本当にやると思います。あの本当にそんなことされたらいくら神本君でも困っちゃいますよね？」

『いくら神本君でも』ってどういうことだ？僕、そんなことされたら普通に困ると思うけど？てか、そんなことされて困らないのは重度の変態だけだ。

「うーん、じゃあ甘えちゃっていいかな。今日はビーフシチューにするつもりだったんだけど……。」

僕はポケットから買物メモを取りだすと、森内さんに手渡す。

「いえいえ、遠慮はご無用です。先にビーフシチュー作り始めてますね。よく煮込んだほうが美味しいですから。」

森内さんはなぜか嬉しそうにそのメモを受け取ると、『ではお先に失礼します。』と言い残して、そそくさと去っていった。

仕方ないし僕も行くか。

僕が職員室に着くと、水本先生は携帯ゲームを熱心にプレイしていた。

「あの……。神本ですけども？」

「……。」

返事はない。この野郎舐めやがって。

「もしもし！神本ですけど！何も用が無いようなら僕はもう帰らせていただきますけど。」

今度は耳元に顔を近づけて大きな声を出す。すると流石の水本先生も、耐え切れなかったのか嫌そうに顔を上げる。

「あんた待つこともできないの？そんなんだと女の子に嫌われるわよ。現に私のあなたに対する評価は下がったもの。」

ハアと僕は深い溜息をつく。

この人はもう30近いというのに……。

「僕の中で先生は女の子には入らないので問題ありません。それより早く用を済ませてもらえますか？」

「あんたも言うじゃない。本当は先生の魅力にメロメロなくせに。」

まあ、いいわ。私も長々とアンタの相手なんかしてる場合じゃないし。」

おいおい、あんたゲームと生徒どっちが大事なんだよ？

「単刀直入に言うわ。あんた、寮を出たこと保護者に報告してないでしょ。」

僕はそんなこと言われるなんて思ってもいなかったので少々驚いた。てつきり、授業をサボっていることを注意されるものとはばかり思っていた。

なんで先生がそんな事知ってるんだ？いや、確かに連絡はしていないんだけど。

「はい、まだです。もう少し落ち着いてから改めて報告しようかと思ってる。」

先生はゴソゴソと机の下をあさり、胸に抱えられるくらいのダンボール箱を引っ張り出して、僕に押し付ける。

「これ寮に届いてたわよ。あんた宛。」

僕が受け取って、開けると中には秋刀魚の蒲焼の缶詰やらカップラーメンやらが僕の好物がパンパンに詰まっていた。

「あんたが遠慮してるのは知ってるわ。心配や迷惑をかけないようにしているのよ。けどあんたが幾ら気をもんだところで、無駄よ。」

あなたのことを心配するに決まっているもの。あんまり口うるさいことは言いたくないんだけど、とりあえず連絡くらいはしときなさいよね。もう行っていいわ。」

確かに水本先生の言うことは間違いない。きっと園長は、どんなに僕が立派な人間になろうとも、心から僕のことを心配するはずだ。僕が迷惑をかけたなり、世話になることを極度に恐れていることを知っていて、こんなに食料を送ってきてくれてしまうような人だ。でも、そんな人だからだ。園長がそんな人だから、僕は甘えてばかりではいけないのだ。

確かに連絡ぐらいいはしとかないな……。

「ほら、何やってんのよ。あんたがここにいたら集中してゲームができないじゃない。」

そう言い放つ水本先生に追いやられて僕は外に出た。正直言つて僕は園長に連絡を入れることに対して、気が進まない。園長の声を聞くは無理して固めてきた何かが崩れ落ちてしまう気がしていたからだ。僕はノーチラス号の荷台にダンボールをくくりつけながら、空に浮かぶ雲を仰いだ。

「ただいま。」

僕が天神荘に帰ると、薫とマコさんがソファーに座り各々ノートパソコンをいじり、キッチンでは森内さんが鼻歌交じりに夕食の支度をしている。猛さんはどうやらいないみたいだ。最近知ったことだがあとの一人は旅に出るとだけ言い残しどこか消えてしまったらしい。

そんな二週間毎日のようにみる代わり映えのない風景を見て僕は不覚にもホッとしてしまった。ここでは、特別な干渉もされなければ、しがらみや遠慮のようなものもない。

「ただいまじゃないよ。君は円に食事当番を押し付けて、罪悪感というものが無いのかい？」

薫が開口一番憎まれ口を叩く。

「おかえり、悠斗君。職員室に呼び出されたみたいじゃないか。」

マコさんが漂白剤のCM並みの爽やかさで聞いてくる。

「あの、別になんともなかったですよ？ちょっと授業を抜け出す癖を注意押されただけです。」

僕はそう言いながら、慌ててダンボールを隠した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

薫とマコさんが顔を見合わせる。

「もう少し上手く隠そうよ。初めから僕たちに見せない工夫をするとかさ。」

「漫画じゃないんだからそんなんで誤魔化せるはずがなかるう。」

二人は口々に僕の不自然な動きを指摘する。

うわ、まずったな。ここで嘘を突き通すのも不自然だし面倒だけど話すか。

きつと嘘をつき通せばこの人達は追求もせずに「ふーん」と鼻を鳴らすだけで見逃してくれたことだろうけども、そんな人達だからこそ、話しても変なふうに思われたりしないはずだ。

僕は観念して洗いざらい話した。因みに僕の簡単な生い立ちについてはとつくに説明済みだ。

「なになに、それじゃあそんな中には食料が入ってんの？」

マコさんが下舐めずるりする素振りをする。案の定気にもとめていないみたいだ。

「はい。秋刀魚の缶詰とかカップメンとかです。」

「秋刀魚の缶詰？カップメン？」

薫が急に口を開く。

もしかして、こいつ知らないのか？

「薫？もしかして知らないの。」

「ばっ、馬鹿。知っているに決まっているだろうが。・・・ただ食べたことないだけだ。」

薫は、勢い良くソファから立ち上がると、恥ずかしそうに真っ赤になって涙目で弁解してくる。最後の方など蚊の鳴くような声になっていた。

それを見た僕に、からかってやりたい気持ちがムンムンと沸き上がる。

「ん？ごめんちょっと聞き取れなかった。今なんて言った？」

僕は申し訳そうな素振りをして聞き返す。言うまでもなくバツチリと聞こえていた。

「・・・食べたことないだけだ。知っている。」

先程よりは大きい声を出す、まだ普段と比べると幾分か小さい。マコさんはニヤニヤしながらこっちを見ている。

「なんで小さい声出すんだよ。聞こえないじゃないか。ねえマコさん。」

「うんそうだね。いつもらしくないよ、薫？熱でもあるの??」

「うううう・・・。」

薫が恨めしそうに目を潤ませて僕とマコさんを交互に睨んでくる。

やばい、ちょっと可愛いかも。

「ちょっと二人ともやめてください。カオちゃんがかわいそうですよ！」

キッチンからエプロンをしたままの森内さんが、手を拭きながら現れる。現れると言っても元々ダイニングキッチンだから姿は見えてただけだ。

「円あ。二人が・・・。」

森内さんの姿を視界に捉えると薫は、トタトタと薫の下に駆けていき、後ろに隠れるように抱きつく。

「そうだね。意地悪することないのにね。神本君もマコさんも、聞こえてたのに酷いです。カオちゃんの声は確かに小さかったけど、キッチンでもちゃんと聞こえましたよ。」

そう言いながら森内さんは、よしよしと薫の頭を撫でている。なんだかわからないが、とても和む。眼福である。

「ははは。ごめん、ごめん。薫が可愛くてさ。ねえ、悠斗君?」

マコさんはまだニヤニヤしている。僕も調子を合わせることにする。

「うん。それはもう。」

「私は愛玩品じゃないよ。そういうことを言いたいのなら勝手に犬でも飼えばいい。特別にこの天神荘でもペットを飼うことを許可しよう。」

薫は森内さんの背中から顔だけちょこんと出すと、すかさず噛み付いてくる。その凶暴さはまるで小心者の小型犬のようである。森内さんはそれを振り返り黙って数秒見つめ、すぐにバツが悪そうに目をそらす。

「……カオちゃんが可愛くてやったのなら仕方ないです。私にその行為を咎めることなどできません。」

「ちよつと！君まで何を言っているんだい、円？」

薫は信じられないといった顔をして数歩後ずさる。

「だってカオちゃんが可愛くてどうしようもないのは本当のことだし仕方ないよ。私に否定することなんてできないわ。」

薫はそのまま後退を続けると、

「君だけは味方だと信じていたのに！！」

と叫び、背を向けて階段を駆け上がるうとする。

「ちよつと待って！みんなでこれ食べようよ！！きつとどんなに舌が肥えた人が食べても美味しいはずだよ？」

薫にヘソを曲げられると、夕飯が遅くなってしまつた焦った僕は、大声を出して呼び止める。それを聞いた薫の足が階段の中腹あたりでピタリと止まる。

「やっぱり、食べてみたかったのか……。」

「今日はビーフシチューだし。明日の夕飯にカップ麺と秋刀魚の蒲焼の缶詰を食べよう。みんなで食べられる分ぐらいはあるし……ね？」

「神本君？カップ麺と秋刀魚の蒲焼ってなんかミスマッチじゃない？それに夕飯にしては味気ない気がするし。秋刀魚の缶詰は朝食にして、カップ麺は今度の休みの日のお昼にでもしたらどうかしら？」

森内さんがいたってまともな指摘をする。

「確かに。夕飯には少しパンチが足りない気がするな。よし次の土曜日に食べよう。」

確かに二つとも大好きだけど、夕飯にはもつとポリューミーなものを食べたい気もするな。

「私は別にかまわないけどね。」

「「えっ!?!」」

いつの間にか薫はゆっくりと階段を下り始めている。それを眺めながらマコさんはまたニヤニヤし始める。

「私は、明日の夕飯がその二つでもかまわないと言ったんだが。」
「どうやら薫は、どうしても明日食べたいみたいである。」

食べたいなら食べたいって言えばいいのにな。

「森内さん。薫もそう言ってるし、明日の夕飯にしよっか?」

「うーん……。そうですね。カオちゃんがそう言うなら。」

森内さんも納得したようだ。マコさんははなから気にもしていないだろう。

「別に私はどちらでもいいのだがな。とりあえず、今晚はビーフシチューだ。円の作るのは特別美味しいぞ。」

そういうと薫はもう一度マコさんの対面に着席する。まるで一度逃げ出しかけたことは無かったかのような態度だ。天神荘では、ソファー前に置かれた綺麗なガラステーブルでご飯を食べるのだ。

「ほら、早く準備したまえよ。君の仕事はポーッと突っ立っていることじゃあないと思うのだが?」

もう普段の尊大な薫に戻っている。

森内さんもただどここの人って感情の浮き沈み早っ!!

「あの、私も手伝います。」

森内さんまで僕についてキッチンに戻ろうとする。この子はなんて良い子なんだ。けれども料理を全部作らせた上に、配膳までさせるわけにはいかない。

「あっ、盛り付けて運ぶだけだし僕がやるよ。せっかくだし座って

テレビでも見ててよ。」

「えっ？でも神本君が言うようにあと配膳だけですし……。それに二人でやったほうが早いですよ？」

これ以上やらせるわけにはいかないぞ。気持ちはありがたいけど、これ以上されたら僕の存在意義がなくなってしまう。

そう考えた僕の態度は当然のように硬化する。しばらくの間森内さんとの小競り合いが続く。

「遠慮せずに円に手伝ってもらいたまえ。配膳した程度で業務をこなしたような顔をされても困るからな。それに円の配膳はプロの技だしな。」

それに終止符を打ったのは薫のこの一言だった。テレビから顔を背けもせずに、そっけなくそう言う。なんだかニヤニヤしているように見えるのは僕の気のせいであろうか？

「ちよ、カオちゃん!!」

急に森内さんがあたふたし始める。どうしたんだろう？

「配膳のプロってなんなの？」

「えっと……あの……。」

森内さんは下を向いてモジモジとしている。

「円ちゃんは、秋葉原のメイド喫茶でメイドさんのバイトをしているんだよ。『いらっしやいませご主人様』ってね。あれ、そう言えば俺まだ見たことないや。あっ、今度の日曜日にみんなで行くよ。」

「ちよつとマコさんまで……。」

森内さんはこの世の終わりのような表情をして下をむいている。

「なんだ、マコ？私はもう来店済みだぞ？あの戦闘服に身を包んだ円はそれはそれはものすごい破壊力だった。まあもう一度みんなで行くということなら、私もやぶさかではないがな。」

「おし、決まり。タケにメール入れとくね。」

そう言うとマコさんは素早くケータイをポケットから取り出す。

「お兄ちゃんはダメ!!」

涙目で森内さんが大きな声を出す。僕が聞いた森内さんの声史上最大のポリウムだった。

「お兄ちゃん馬鹿だから、スグに問題を起こすから店には入れたくないの。」

みんな一斉にガサツなああの男のことを思い出す。

「ああ、そうだね。あの男を誘うのはやめておこう。」

*

森内さんが作ったビーフシチューは絶品以外の言葉が浮かばないほどの素晴らしい味だった。正直言って有名レストランで中々の値段で出てきても文句は無いというレベルだ。僕はもう恥ずかしくてビーフシチューなんて作れない。

「あつ、僕ちよつとトイレ行ってくるね。」

僕は騒がしい食卓をクオリティーの低い言い訳を残して後にする。

薫には『君のトイレに関する報告を誰が欲していると思う?』と怒られてしまった。

屋上に続くヒンヤリとした扉のノブを捻り、僕は夜空のもとに出る。遠くのビルが闇に浮かぶ灯台のように光り輝いている。数秒間その景色を見つめると僕は、おもむろにポケットに手をつ込み、携帯電話を取り出し、目障りなほどに機械的に輝くそのディスプレイを見つめる。そよそよとさざめく夜風が心地よい。

「確かにいい加減電話しなきゃな。」

自分自身に言い聞かせるようにそうつぶやく。

僕にはその小さな機械が、まるで鉛のように重たく感じられた。しかし何時までもグダグダしてられない。いつ誰が屋上に登ってくるかわからないし、もしそれがそろそろ帰宅してもおかしくない猛さなんだった日には、今日は電話をするのを諦めなくてはいけなくなる（猛さんの相手は本当に面倒くさい。ガキ大将をそのまま大人にしたような人なのだ。）。

ピポパポピピピ。

僕は思い切つて一息にボタンを操作し、電話帳に登録してある美咲園を選択する。

ツーツーツー。

どうやら話中みたいだ。仕方ないから園長の携帯にかけるか。今度は美咲園ではなく、園長の携帯の番号を選んで決定ボタンを押す。

プルルルル。

耳元でコールする音が鳴り、暫くしてぶちつと電話を取る音がする。

「あつ、もしもし……。」

『ただいま電話に出ることができません。御用の方はピーとなりましたらお名前とご要件をお話ください。』

ん？留守電だ。着信入れとけばかけ返すか……。

僕はそう考えると諦めてポケットに携帯をしまい、もう一度景色を眺める。正直に言つてその時僕は心のどこかで電話が繋がらなかつたことにホツとしていた。

「寒いしラウンジに戻る。」

また、心の底からあの騒がしい空間に一刻も早く戻りたいとも感じていた。

*

「まさに人類の叡智だね。どんなに手をつくそうとも、どんなに高みを目指し鍛錬をつもつとも、科学された食品には勝てないのだね。フランスから呼んだシェフもここまでの感動を私にもたらすことはなかつた。」

「……ははは……。」

僕はそれを聞いて苦笑いをもらすことしかできなかった。どんなに飾り立てた表現をしようとも、薫が手にしているのは秋刀魚の缶詰と味噌味のカップラーメンだったからである。

おいおい？いまフランスからシェフを呼んだって言った？？

相変わらずの金持ちパワーには、毎度毎度驚かされている。

「大げさだなあ。僕もサンカバもカップ麺も大好きだけど流石に有名シェフのフランス料理には・・・。」

「ほほう。秋刀魚の蒲焼はサンカバと略すのか。覚えておこう。私を心の底から震え上がらせた初めての食品だからね。カップ麺もとても美味しいがこの缶詰は本当にセンサーショナルだ。」

「いやいや、僕が勝手にそう略してるだけだから。それにサンカバもカップ麺もそれぞれ150円程度だよ。それを、値段を想像するのもはばかられるようなフランス料理と比べるなんて・・・。」
それを聞くと、薫は呆れたようにヤレヤレと両手を肩の高さまであげる。

「君はお金という単位で示されたものがそのものの価値だとも思っているのかい？これほどまでに愚かな意見は聞いたことが無い。そうなった場合お金を持っていない君は何の価値も無い人間ということになってしまふが良いのかい？それに私はフランス料理とだけ比べて評価しているわけではない。中華・イタリアンなど様々なジャンルと比べてなお無類だと言っているんだ。」

薫が言っていることに、一理どころか全ての理があるように思えて、僕は何も言い返すことができない。

「もういいかな。感動に浸る私に君の相手をしている暇など無いのだよ。用があるのなら2時間後くらいに話しかけてくれたまえ。」

一方薫は、そんな僕の様子なんかにはお構いなしで一人サンカバとの思い出に目を瞑って浸り始める。

僕がサンカバを持ち帰ったのが木曜日で、もうすでに金・土と食べ。今まさに日曜日の昼食として食しているのだから、間違いない。これで三日目ということになる。よく飽きないものだ。因みに僕は流石にごめんだったので、薫のためにスーパーで調達してくるだけに留めた。

「あれ、二人とも早いね。なんだか待たせちゃったみたいでごめん

ね。」

不意に後ろから声がする。僕が振り返ると、マコさんが眠そうな目をこすりながら階段を下りてくるところだった。

もう11時30分なのに何でこんなに眠そうなんだよ。

しかし流石というべきか、服装だけはバツチリ決まっている。細身のパンツに細身の टीーシャツ という シンプルな格好をしているというのに、僕と同じ人間だとは思えない。

「ふんっ。遅いよマコ。私と悠斗などもう二時間も前に準備を整えて待っているというのに。」

薫が片目だけ開けて憎々しげに呟く。

「昨日仕事終わるのが遅くなっちゃってさ。まあ良いじゃないか。

俺の車で行くんだし混むこともないだろ？」

「えっ！？マコさん車乗れるんですか？てか車持ってるんですか？」

「当然だよ。情報屋はネットの世界だけに引きこもっている人間がやれるような稼業じゃないからね。」

「ふん。そんな御託はどうでもいい。私はもう待ちくたびれている。早く行こう。」

そういつて薫は席を立とうとする。しかし、薫の頬つぺたには秋刀魚の蒲焼のたれが可愛らしく付着している。尊大な態度をとるのならば、そういう間抜けなミスはしないで貰いたい。どんなに偉そうなことを言っても、いまいち迫力にかける。

「ちよっと待って！！」

僕は慌てて薫を呼び止めた。

「なんだね。これだけ待った私に君はこれ以上待てとでも言うのかい？」

「いや、そうじゃなくてほっぺにたれが。」

そう言いながら僕はポケットからハンカチを取り出して、薫の頬を拭いてあげる。その様子をマコさんはニヤニヤ眺めている。

「き・君は何がしたいんだ！！たれぐらい言ってくれれば自分で拭けると言うのに！！」

「はいはい。たれぐらいの事だから僕が拭かせてもらったの。」
薫が真っ赤になって震えているが僕は気にしない。

「ほら、君はもう待ちくたびれてるんだろ？ならこんな所で油を売ってないで行くよ。マコさんよろしくお願いします。」

「悠斗君はなかなか薫をからかうのが上手いね。俺もまだまだだな。」

「何言ってるんですか？僕はからかってなんかいませんよ。」

「これだから君は凄いなだよ。それじゃ行こう。円ちゃんも待つてると思うし。」

マコさんはそう言うと、天神荘から出て行った。それに恨めしそうな顔をした薫が続く。僕もマコさんの車がどこに止まっているのかわらなかつたので鍵を閉めると急いで後を追った。

マコさんの車はすぐ側の駐車場に止めてあった。車に詳しくない僕が見ても一目で高級車だとわかる。薫はなんの躊躇いも無く後部座席に乗り込んでいく。

「さあ乗ってよ。」

マコさんが尻込みする僕にさわやかに呼びかけている。

「えっ、でもいいんですか？こんな高そうな車？」

僕は車が放つあまりの威圧感に思わず頓珍漢な質問をしてしまう。それを聞くとすかさず後部座席の窓が開き、薫が顔をのぞかせる。

「当たり前であろう。車は置いて鑑賞するものではない。乗るものだ。」

半分あっていて、半分間違つてもいる気がした。このレベルの車なら観賞用としてディスプレイされていてもなんら不思議ではない。マコさんは何者なんだ？ただのチャライお兄さんではないのか？

「薫の言う通りだよ、悠斗君。今日はドライブが目的じゃないんだからここはスンナリと乗ってくれよ。」

「えーと、それじゃあ失礼します。」

僕は念には念を入れて綺麗に靴の泥を払ってから乗車した。確かに早くしないと森内さんのシフトの時間が終わってしまう。そうし

たら何のためにメイドカフェに行くのか全くわからない。

*

「おかえりなさいませ、ご主人様。」

可愛らしい元気のいい挨拶で僕達は店内に迎え入れられた。なんだけこのファンシーな空間に僕たち三人はひどく浮いている気がする。

マコさんも薰もあまり飾り気のない格好をしているのだが、所々にセンスの良さを漂わせている。表参道とかを歩いても何ら違和感はない。しかしそれは逆説的にうまくこの空間に溶け込めていないということを表す。僕はと言うと・・・この二人とは比べないで欲しい。僕的には普通だと思っている。

「へえー、メイド喫茶ってこんな感じなんだ。女の子がいっぱい癒されるね。ただいま、メイドさん。」

マコさんはそう言うと、出迎えてくれたメイドさんにウインクする。メイドさんもこんな反応をされたのが初めてなのか、若干顔を赤くしている。ピンクの短めのメイド服はこのちまちまとした小柄なこの女の子によく似合っていた。

このたらし野郎が。だからこのファンシーな空間にうまくとけ込めないんだ。

横を見ると薰は薰で自分が褒められたかのように得意げに胸を張って、『そうだろ、そうだろ。いい所だろ』などと一人呟いている。

はたしてこいつはどういった立ち居地で物を言っているのだろうか？

「あの・・・それではお席にご案内いたします。」

我に帰ったメイドさんが思いだしたかのように、僕達をテーブルに案内する。

「あつ、皆さん！」

テーブルに着席する僕達を見つけた森内さんが駆け寄ってくる。

ピンク基調のそのメイド服をきた森内さんは可愛らしいのと同時に、

なぜかひどく肉感的で、僕は思わず唾をゴクリとをのみこんだ。

同じ制服なのにさっきの子とだいぶ印象が違うな。森内さんが着るところ何て言うか凄く駆け立てるものがあるというか……つて僕は何を考えているんだ！

「よつす、円ちゃん！なんか円ちゃんが着るとスタイルが良いからセクシーだね。これは猛を呼びたくないわけだ。ほら、悠斗君も視線を釘付けにされてるよ。」

「えっ、あの……そんなに見ないでください！」

真っ赤になつた森内さんがスカートの丈を抑えてモジモジしている。森内さん。勿論スカートの短さもあれんだけど、問題は上半身のたわわな果実のほうが原因かと……。

普段からタイトなシャツをボーイツシュに着こなしている薫が以外にもアレなのは知っていたが、円ちゃんはそれ以上だ。普段ストンとした女の子らしい服を着ていることが多かったから気がつかなかつたよ。

ふと僕の横から刺すように薫の冷たい視線を感じ、我に帰る。

「マコさん！勝手にそんなこと言わないでください！！薫も僕をそんな目で見ないでくれ！！」

僕はあせつて弁解を試みる。

「えっ！？じゃあ悠斗くんは円ちゃんの魅力に釘付けにはならないつてことなのかい？？それは失礼な話だ。」

「……くっ。ああ言えばこう言う。別にそんなこと言っていないじゃないですか。」

「じゃあ俺の言っている事に間違いは無いわけだね。」

こいつどこまで人をからかうのが好きなんだよ。

「ああ、マコの言う通り悠斗は円のことをいやらしい目で見ていた。そのときの顔は私が横でしっかりと確認済みだ。」

「もう良いです。なんとも好きに言ってください。」

僕はどんなに抗つてもどうにもならない事を悟り、ぐったりと椅子にもたれ掛かる。そこに不意に店長らしき人から森内さんに声が

かかる。

「あ・・あの？私お仕事がありますんで楽しんでいってください。あつ、何かありましたらおよびくださいね、ご主人様。って、あつっ！！なんでもないんです！！！！」

そう言つと森内さんは、慌ててキツチンに駆け込んでいった。きつと最後のご主人様は思わず出てしまったのだらう。職業病とは何て恐ろしいんだ。

「・・・薫、今聞いた？」

「ああ、聞いたよ。円はなんて破壊力を持った萌え萌え攻撃を持っているんだ。私の脆弱な自制心ではどうにも対抗できないよ。」

勿論さっきの森内さんは可愛かったのだが僕はそれ以上に薫の破顔ぶりに驚いた。驚いたというよりそんな薫は見たくなかった。いつものクールな薫を返して！！

「それにマコ。薫は御用があれば申し付けると言っていたよ？？君も勿論聞いただろ？」

「ああ。聞き逃すはずもない。」

「ならば早速注文しようではないか。これなんかどうだい？」

「ん、どれどれ？流石は薫。お目が高いね。でもこれもなかなかだと思つただけどどうか？」

「ぐぬう。マコもなかなかやるじゃないか。確かにこれも捨てがたい。」

二人はああでもこうでもないメニューを指さして、別の世界に昇つていつてしまった。僕は急にものすごい疎外感に襲われる。初めからこの空間にあまりとけ込めていなかったというのに、二人が違う国に行ってしまったら僕は一人ぼっちじゃないか。

僕は思わずキョロキョロと見回した。視線の先では森内さんが忙しなく動いている。店内のあちこちで『円ちゃーん！！こつち！！』、『こつちもお願い！！』などという声が聞こえる。

大人気だな。まあ確かにやたらと似合ってるもんな。

「おい！！聞いているのかい！？円を見つめるのも大概にしたまえ。」

不意に肩をこづかれて我に帰る。横では薫がぶすつとした表情で僕を見上げている。

「君だけまだ注文を決めていないんだぞ。早くしたまえ。君の遅れは我々の遅れにもつながる。団体行動という言葉の意味をもう少し考えてみたらどうだい？」

「あつ、ごめん。すぐ決めるから……って二人がメニューを独占してたから見られなかったんじゃないか。」

「まあまあ、悠斗君。薫は君が円ばかり見てるから妬いてるんだよ。とっても可愛いじゃないか。」

この人は場を引つ掻き回さなければいけない業を前世で負ってしまったのだらうか？このレベルまで来るとそうでもなければ納得がいかない。

「マコ！！！！君はどれだけトチ狂ったことを口にしてるかわかってるのか？？この私が妬いているだと？それもこの穀潰しに……。」

薫も薫で一々反応するなよ、全く……。

これ以上聞いていると、意味も無く傷つけられそうなので、僕は適当にメニューを指さしてその言葉を遮った。

「これ、僕はこれにするよ！！！」

薫とマコさんの視線が一斉にメニュー表に注がれる。

「悠斗君もなかなかやるね。」

「ああ。これを頼むとはなかなかの上級者だね。」

僕がメニュー表をのぞき込むと『マスターハンバーグ』と書いてあつて。適当に選んだにしては中々美味しそうなメニューじゃないか？

「甘いよ、悠斗君。説明書きを読んでみたまえ。マスターハンバーグのマスターはマスタードのマスターだよ。」

「この数値を表す星を見てみたまえ、ツンデレ度に星が五つも付いているじゃないか。」

「全体をマスタードが覆う、ツンデレ度100%なメニューですっ

て・・・僕辛いのあんまり得意じゃないんだ。変更す・・・」
「あつ、円。お絵かきオムライス2つとマスターハンバーグ1つ。
あと紅茶三つね。」

「はい。少々お待ちください。すぐにお持ちします。」
「ってなんで注文しちゃうんだよ!?もう・・・」

二人はもう僕を置き去りにして別の世界に旅立っている。僕はハ
アと思わず深い溜息をつく。これ以上幸せが逃げる心配も無いだろ
うから安心である。

程なくしてマスタードをかけたハンバーグなのか、マスタードに
ハンバーグが混入したのか判別しがたい謎の物体が運ばれてきた。

「メッセージは任せるが名前も入れることを忘れずにね。」

「あつ、僕もそれをお願い。任せた方がメイドさんの魅力が活きる
気がするし。」

二人は僕のマスターハンバーグには目もくれず、心から楽しそう
に呑気な会話をしている。

それから森内さんは少し困った表情をしたあと遠慮がちに『LOVE
E力ちゃん』とかいた。やばい。正直可愛い。僕もこっちがいい
・・・。

今度は僕の番だ。申し訳なさそうにその黄色い物体を手にとった
森内さんはウルウルとした上目遣いでこちらを見つめると、

「あの、ご主人様がエッチな目で見るから悪いんですからね。御仕
置きです。けど、美味しく食べてもらえたら嬉しいですよ。」

と叫んで僕の前にそれを押し付けるように置くと、また厨房に走り
去っていった。マニユアルとはいえ森内さんがこんなこと言うなん
て・・・。多分今のはキャラ設定半分、本当に恥ずかしかったの半
分というところだろう。

「さあ、じゃあ食べようか。」

「ああ、そうだね。では、挨拶を頼むよ、悠斗。」

「えっ!?僕がするの?この黄色いモンスターを食べなきゃいけない
のにな?」

「君が自分で頼んだんじゃないか。黄色いモンスターに罪はない。そうだろ？」

正直に言えば残して帰りたぐら이었다。しかし美咲園育ちの僕は、徹底的に食べ物のありがたさを身に叩き込まれている。ここで残して帰るのは僕のモラルが許さない。

「はいはい。じゃあ、いただきます。」

「「いただきます！」」

僕は半泣きになりながらマスタードにまみれたハンバーグを喉に押し込み、二人は美味しそうにオムライスを完食した。

それから僕たちは、普段から森内さんと一緒に住んでいるのに、森内さんばかりを指名してメイド喫茶をエンジョイした。冷静に考えれば身内を熱烈指名する客も少ないことだろう。それに、初めはファンシーな空間に溶け込むことができいなと思ったりしていたのが嘘のようで、結局どんなお客さんよりもノリノリで遊んでいた。

*

「いつてらつしゃいませ、ご主人様！」

森内さんが、もうあがりの時間ということで、入店時に出迎えてくれたメイドさんに見送られて僕達は店を後にした。その際にマコさんはちゃっかり連絡先を書いた名刺を渡していたから驚きだ。

「どうする？まだ三時だしどっか寄りたいたいところとかある？」

マコさんがスキップするような爽やかな声色で僕達に尋ねる。

「渋谷に寄ることは可能かい？ちよつと買いたいものがあるんだが。」

「うん、構わないよ。悠斗君もどこかある？」

「あの・・・？申し訳ないんですが、僕はこれから少し用事があるんで、これで失礼させてもらいます。」

「用事？それじゃあそこまで送ろうか？」

「いえ、大丈夫です。ここからちよつと遠いんで。夕飯はカレーを作っておいたんで心配しないでください。」

「そう？じゃあ行こうか、薫。」

「うむ。ではまた夜に。」

そう言うのと二人はさきほど車を止めた駐車場に向かつて歩いていった。その姿が見えなくなるのを待って、僕は深く溜息をつく。

僕はこれから僕が育った場所。そう、美咲園に向かおうとしていた。薫がサンカバを三日連続で食べるのと並行して、僕も三日連続で美咲園に連絡を入れ続けている。普通ならいくら園長が忙しくても、美咲園には裕二というしつかりとした小学生がいるので、そいつが代わりに出るはずなのだ。しかし、どういふことか、どうにもこうにも継らない。そこで僕は諦めて自らの足で赴くことにしたのだ。

なんで継らないんだろ？まあいいや。行けば嫌でも会えるし。カップメンとサンカバのお礼も言わなきゃ。

僕は、足を駅のある方角に向けると、混みあつたホームから人の間を縫って電車に滑り込む。美咲園は都内から電車でおおよそ30分くらいの、神奈川県のとある地区にある。そこらへん一帯は都会と田舎を絶妙なバランスで融合させたような場所で、大学のキャンパスがある以外は物静かな住宅街になっている。横浜駅から10分程度とは思えないほど緑も多く、とても住みやすい人気のベッドタウンである。近くには大型のスーパーマーケットもあり、生活するのになんの不便もない場所だ。唯一の欠点として駅から結構な距離があり、自転車を持っていない場合は、バスに乗らなければならないという点ぐらいであろうか。

「あつ、ありがとございます。ほら、たー君お兄ちゃんにありがとう言いなさい。」

「お兄ちゃん、ありがと。」

どんなことを言っただけを譲ればいいのかわからないので、無言で席を立ち吊革をつかむと、その親子からスグにお礼を言われる。僕はそれに対してもどんなふうに戻事をしていいのかわからなかった

ので、とりあえず引きつったようなぎこちない会釈で応じておいた。その吊革にだらしなく体重をあずけながら窓の外を何気なく眺めると、うつすらと映る僕自身の冴えない顔を透かして外の景色が見える。もう既に先程までの大都会の様子はなく緑もチラホラと視界に飛び込むようになってきていた。もう目的地が近い証拠だ。

思えば僕がその街に来たのは、小学校一年生の時である。ちょうど六歳の誕生日の日に僕は園長に引き取られた。両親を事故で亡くし、親戚をたらい回しにされ、どうしようもなく不安に苛まれていた僕を、園長は『こんにちは、悠斗。待ってたよ。これからは、ここが君のお家だからね』と満面の笑みで出迎えてくれた。その表情を見た僕は、不意に体中を駆け巡っていた緊張やら、警戒心やらが一気に体から抜けて、声をあげて泣いてしまった。幼心に『僕にも味方してくれる人がいるんだ』って事を素直に理解できたんだと思う。その時の園長の少しだけ困っているのが喜んでいるのかわからない。とにかく慈しむような優しい笑顔は今も僕の心の奥底に、宝石というより炬燵のような温かさを持って輝き続けている。

目的の駅に降り立つと、なんだか懐かしい匂いがした。それが食べ物屋の匂いなのか、近くにある工場が原因の匂いなのかはわからないのだが、その街その街にそれぞれある、匂いを嗅いだ瞬間にこれだとわかるようなあの匂いだ。

決して良い匂いでは無いのだが、僕はこの匂いが好きだ。きっとこれはパブロフの犬や刷り込み的な反射反応なのだろう。なんだか懐かしくなるし、安心する。

「まあ一ヶ月ちよいしかこの街を離れてない僕が言うのも変な話か。」
そんなことを考えながら、駅から見えるドブ川を伸びをしながら眺める。

ここに住んでいたときは、駅まで自転車で来てそのへんに駐車して、何度もレッカーされたな。その度以後から高架下の収集場に罰金を握り締めて回収しに行ったものだ。しかし今日は自転車も無いので、

諦めてバスに乗ることにする。下飯田循環というグルグルグル同じ場所を回り続けるバスに揺られること約15分、小さな味気のない公園と大きなスーパーマーケットが見えてきた。僕は停止ブザーを鳴らし、バスから降りる。

僕は、美咲園に行く前にそのスーパーマーケットに寄って箱入りのアイスを購入した。美咲園に残る唯一の子供である裕二が、チョコ好きなのを思い出して、チョコでコーティングされたバニラのアイスを選んだ。久しぶりの美咲園に、内心僕は少しドキドキしていた。アイスを買ったのも手土産を持っていけばスンナリと入り込める気がしたからだ。

スーパー前の大通りを渡り、公園の敷地内に入る。そこでは、休日ということもあり小学校低学年ぐらいの集団がすべり台の上から、ボールを投げて遊んでいる。なかなかルールが見えてこないアクロバティックな遊びである。この公園を横断したら後は手前の道に沿ってまっすぐ進み、すぐに見えてくるタバコとダイドーの自動販売機の手前を右に曲がるだけだ。その自動販売機のすぐ横には、僕が住んでいた時と全く変わらずに、誰のものかわからないバイクが違法駐車されていた。

そんなに早く変わるものなんてあるはずもないのに、その風景を見て僕はなぜだか笑みがこぼれるする。『ふと気がつけば、もうそこに大切なものは無い。』両親を亡くしたあの日から僕は常にそんな不安に苛まれるようになっていた。

穏やかなオード色と肌色の中間色のような外壁に、白に限りなく薄いピンクを混ぜたような色の門扉、テニスコートよりも少しだけ狭い庭にワゴン車が一台ぐらい止まれる位の駐車スペース。僕が知っている代わりのない美咲園である。車が止まっていないのは園長が買い物か何かで出かけている証拠だ。日曜日の夕飯近いこの時間帯、駅前のスーパーが特売だということで園長は、いつもわざわざ車に乗って出かけるのだ。

僕はそんな美咲園を見て駆け寄りたい気持ちに駆られる。しかしな

んだか衝動に身を任せるのも気恥しく、はやる気持ちを抑えてゆつくりと近づき扉をくぐる。園長が日曜大工で取り付けたその鉄の扉は相も変わらず、ギーといういかにも立て付けの悪そうな音を立てる。その暖かな色合いは、年月が立ちくすんでしまった今でも園長の暖かな人柄を見ているようで、僕は大好きだった。

なんか来る前は嫌だったけど意外に悪くないもんだな。

僕は数九月ぶりに訪れる美咲園を見てこんなにも自分の心の中に様々な感情が湧き出てくることに若干の驚きを感じていた。

僕が呼び鈴を鳴らすと耳慣れた童謡が流れる。しかしどれだけ待っても園内はシーンと静まり返っていて、誰かが顔を出す様子もない。

あれ、裕二も買物に付き合っているのかな？

敷地をぐるっと回ってみるが、裏口の扉もしまっているし、カーテンが閉められている為、庭に面している大きな窓からも中の様子を伺うことができない。

僕はどうしようかと思案したものの、アイスが溶けてしまっただけではないので、中に入って待つことにした。鍵はいつもの場所にいつもの通り置いてあった。美咲園では鍵を庭の如雨露の中に隠している。その習わしは僕が小さいとき何度も何度も鍵を無くしてきてしまった事から始まった。しかし裕二は小学3年生とは思えないくらい確りしている。そのためあいつが鍵をなくすなんて思えない。

それなのにまだここに隠してたのか。全くいつまでも無用心な話しだ。

プランターに植えられたポピーが元気なく鎌首を下げていたので、水をやりながらそんな思い出が詰まった風習を思いだし、また顔をほころばせる。

さてアイス溶けちゃうしそろそろ行くか。

水をあげていた如雨露をもとの場所に戻すと、もう一度玄関側に回り込む。

「ただいまー。」

誰もいないことは既にわかっていたので、まるで自分自身に言っ

ているかのようなポリウムで独り言ち、靴を脱ぎ捨ててあがりこむ。玄関の壁には全く変わらず写真が貼り付けられたコルクボードがかけられていて、僕はいつもの通りそこに玄関の鍵を引っ掛けた。一番最初に帰ってきた人がこのコルクボードに鍵をかけて、一番最後に出る人が如雨露に鍵を隠す。これも美咲園の習わしの一つだ。

短い廊下を抜けてスグに居間に出る。すると今まで通りの風景とは違い、不意に妙な違和感に襲われる。

なんだか普段より広々としている気がする。

ん？模様替えでもしたのかな？？まあいいか。とりあえずアイスをしまつてテレビでも見てよつと。

とりあえず手持ちのアイスを溶かすわけにもいかないので、僕は冷蔵庫の前へと足を伸ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659x/>

僕と彼女と彼女の大切な場所

2011年10月21日08時12分発行